

設立：2007年12月、認定取得：2016年11月
理事 福林 良典

約1年前にも、ここで道普請人の紹介をさせていただいた。最近の活動状況を、ということで道普請人の2017年がどのようなものであったか、紹介したい。

10周年

道普請人は、「開発途上国の問題は、現地に適したやり方で、そこに住む人々自身で解決していく」ことの実現を目指す。農道の雨季の通行性を改善し社会サービスへのアクセスを確保すべく、住民とともに道直しを行っている。この活動を始めて10年がたった。

主な道直しの方法の一つに、土のうを利用して路盤を構築する道路整備手法がある。多様な農村部の道路状況に対応すべく、擁壁や沈下橋の設置など時にはコンクリートも使う。住民との道直しにもバリエーションが出てきている。道路が寸断されてしまうという問題箇所立ち、最適な方法と実施体制を模索し、対策を行う。写真1はフィリピンでの日本のNPOとの連携事業で、現地の行政と住民が一体となり建設中の沈下橋である。他のNPOと連携することで、彼らが現地に根差して構築したネットワークをベースに、私たちの土木技術の移転を円滑に行うことができた。

ピンチをチャンスにする

2017年は、ミャンマーでの申請事業が、ある誤解から不採択通知を受けるという事態で始まった。10年間もやっていると、いつも順風満帆とはいかない。誤解を解くべく説明を重ねた結果、最終的には採択された。しかし、それまで日本人スタッフの短期派遣で進めていた体制を、日本人を常駐させるように、との条件が付けられた。最低1年間現地（ミャンマー）に駐在し、道普請人の代表を任せられる人材は、なかなか集まらない。

この状況を理事長の木村教授は、大胆なアイデアで打開した。人材が集まらないのなら、育てるのである。学部3回生が4回生に上がる前に一年間休学し、現地に駐在し予算約3,500万円のODA事業の業務調整を行うことになった。挑戦心あふれる、手を挙げてくれた学生（前田紘人君）にも、拍手喝さいしたい。

現地のパートナーであるローカル NGO、道路整備の技術指導を担当するシニアエンジニア（大手ゼネコンを定年退職された成熟世代）、団体スタッフの理解と協力もあり、そして前田君自身の適性と頑張りもあり（写真2）、業務調整として務め上げ先月に約一年間の任期を終えて帰国した。私自身、正直なところ最初は学生に務まるか不安があったが、育てるという気概と適性を見抜くことの重要性を痛感した。今では、このような形で一人でも多くの若者にチャンスを与えたいと思う。



人員の入れ替わり

NPOに限ったことではないと思うが、人材の定着が難しい。2016年末年に約6年間勤めた職員が、一身上の都合により退職した。2017年の3月には、ケニア駐在員も親の介護のため帰国せざるをえず、退職することになった。団体運営側の立場に立つと職員の退職は痛手であり、新しい人材確保には労力がかかる。しかし、次はどういう人材と仕事ができるのかと、前向きに考えるようにしている。

2017年は、ケニア、そして新たに事業を開始するルワンダに、それぞれ新しい駐在員を配置した。道普請人の職員になり間もなく派遣され、現地では一人でローカルスタッフを相手に事業を進める必要がある。メールを中心に国際電話やスカイプ等で連絡を密にとり、できるだけチームとしての取組にしようと心がけている。

次の10年に向けて初心を忘れずに

ある助成金事業に申請したところ、書類審査を通過し面接に臨んだ。過去2度申請し採択には至らなかったが、三度目の挑戦で面接まで進むことができた。助成団体の担当者の方の、当団体活動に期待されている様子が感じられた。そして、知らないところでも、団体活動の趣旨や実績が、人の心を打つこともあるという認識を新たにした。現場に立てば事業を計画通りに進めることに一生懸命になり、団体運営者としては事業・資金計画にばかり気が行きがちだ。お世辞や気遣いではない、第三者からの応援メッセージはとても励みになり、また初心に帰る機会となる。

途上国の道路行政官が日本に来て受ける研修コース中の企業紹介イベントで、NPOでありながら事業活動紹介の機会を得た。彼らにとって手の届きやすい、身近な問題の解決方法の一つとして大いに関心をもってくれた、と手ごたえを感じている。

次の10年に向けて、色々な困難はあると思うが、初心に帰り現場や応援者の気持ちを思い出し、活動に励みたい。



写真1 沈下橋建設状況（フィリピン）



写真2 住民と打合せをする前田君（写真中央）

認定 NPO 法人 道普請人

理事長 木村 亮

URL: <http://coreroad.org/> E-mail: info@coreroad.org